

川端康成「青い海黒い海」の文体について

永尾章曹

はじめに

文章の類型を追究するための基礎的作業の一つとして、去る六月、「田園の憂鬱」の文体についての愚見を発表した(注1)。本稿も、その前稿に続く、一連の作業の一環である。

ここにいう文章とは、有機的統一体である言語表現の全体を意味する。たとえば、一作品というようなものである。文体とは、そうした文章が個別の作品として有する個別の特質を意味する。文章の類型を追究するための基礎的作業の一つとして、「青い海黒い海」の、個別の作品として有する特質について考えてみたいと思うのである。テキストには、岩波文庫「伊豆の踊子・温泉宿 他四篇」を用いる。

「青い海黒い海」の文体について

「青い海黒い海」は、「第一の遺言」「第二の遺言」「作者の言葉」という三部にわかれている作品である。本稿では、その三部のうちから「第一の遺言」をとりあげ、その「第一の遺言」の構造に

ついて考察することを中心に作業を進めてゆきたいと思う。

まず、「第一の遺言」の冒頭の部分と終末の部分を見てみる。

1. 帆かけ船の船頭です。

「おおい。」

「おおい。」

河波の上の呼声でほうと眠りから覚めると、私の眼に船の帆が白い渡鳥の群のやうに浮びました。さうです。白帆を見た瞬間の私は、その胸に鳥を飛ばせてある時の青空のやうに無心でした。

「おおい。」

「おおい。生きてるのかあ。」

帆かけ船の船頭に呼ばれてこの世へ新しく生れたやうに私は眼を開いたのです。

——私は一月程前にも、女の呼声でこの世に生き返つた人間なんです。そして、その日の夕方には、その女が遊覧船でこの海浜に来ることになつてゐるのでした。

私は顔に載せてゐた軽木帽を捨てて立ち上りながら、日に焦げた腹に河の水をかけました。夕方近くの風を待つてゐた帆船が河を上つて来たのでせう。波の光が夕方でした。(岩波文庫「伊豆

2. そして、帆かけ船の船頭の声で目を覚ますと、りか子の声で生き返つたことを思ひ出したのです。

もう日が半島の上に傾いておりました。しかし私は三才のりか子のやうに、日が西の半島から昇つたとは思ふことが出来ませんでした。

もう直ぐに、りか子の汽船が沖へ現れるでせう。そして、彼女は沖から遊覧船でこの浜辺へ来るでせう。

りか子は船室に寝ころびながら、足袋を脱いでしまつた美しい足を船腹に突つ張つて、波の動揺を支へてゐるのでせう。その姿を描いた頭で、私は河口を立ち去つたのでした。(104)

例1が冒頭の部分であり、例2が終末の部分である。文庫本の頁数で十頁隔つてゐる、この、例1と例2とを比較してみると、意外なことに気付く。例1の内容が、例2においてもほとんどそのまま重複されてゐるように思われるのである。例1と例2との内容の照応関係を一一説くことは省略するけれども、次のような点は無視できない。まず、例1の「波の光が夕方でした」に対して、例2の「もう日が半島の上に傾いておりました」がある。次に、例1において、「その日の夕方には、その女が遊覧船でこの海浜に来ることになつてゐるのでした」と「波の光が夕方でした」とをあわせて、「その女」が間もなくやつて来る状態が想像されるのに対して、例2において「もう直ぐに、りか子の汽船が沖へ現れるでせう。そして、彼女は沖から遊覧船でこの浜辺へ来るでせう」があることが指摘できる。例1、例2ともに、その内容が、夕方の初めであり、間もなく「その女(りか子)」がやつて来る状態ということなのである。両

者の中で、照応関係が明らかに思われるのは、例2の終りの文「その姿を描いた頭で、私は河口を立ち去つたのでした」だけである。例1から例2に至るまでの十頁の間には、内容上、何らの文脈の展開もなかつたのであろうか。十頁の間をたずねてみたい。

この問題を説明する第一の手がかりとして次のようなものがある。3.——私は一枚の声の葉を見て、これらのことをすべて連想したといふのはありません。ただ、一枚の声の葉からも、きさ子が二十になつたことからも、同じやうに戦ひを挑まれた気持がしたといふだけなんです。(103~104)

例2の直前に位置する部分である。この例に「ただ、一枚の声の葉からも、きさ子が二十になつたことからも、同じやうに戦ひを挑まれた気持がした」とある点が注目されるのである。まず、ここに見られる「一枚の声の葉」「きさ子が二十になつたこと」についての考察から出発する。

「一枚の声の葉」というのをたずねてみると、それは、単に「一枚の声の葉」という語句として用いられているというやうなものではない。一つのまとまりをもつたものとして、名付けて言えば「一枚の声の葉」の話しというやうなものとして認められるのである。

「きさ子が二十になつたこと」というのも同様である。それぞれについて、その主要部分をとりあげてみる。

4. そんなわけでその日も、砂の上へ寝ころがりに行つたのでした。空が澄んでゐたので鳥が近く見えました。ヨットの帆の黄色いのが分りました。そのヨットはちよつと見ると、若い夫婦かなんか乗つてゐさうですけれども、実はドイツ人のおぢいさんなんです。とにかく私は、熱い砂が背中の皮膚に馴染んで来るのを感じ

ながら、主人のみない部屋の障子戸のやうな眼で、海の景色を眺めてゐました。ところが、私の眼に一本の線を引いてゐるものがありました。

①一枚の芦の葉です。

②その線がだんだんはつきりしてきました。③せつかく近づいた島が、そのために、だんだん遠退いて行きました。④芦の葉が私の眼の中一ぱいに拡がつて来ました。⑤私の眼は一枚の芦の葉になつて行きました。⑥やがて、私は一枚の芦の葉でした。⑦芦の葉はおごそかに揺れてゐました。⑧その芦の葉が、川口や海原や島々や半島の大きい景色を、私の眼の中で完全に支配してゐるではありませんか。⑨私は、戦ひを挑まれてゐるやうな気持ちになつて来ました。⑩そして、じりじり迫つて来る芦の葉の力に抑へつけられて行くのでした。(95)

5 ①ところが、去年の秋のことでした。②私はふと気がつきました。

③「きさ子は二十になつた。」

④「私と婚約した十七のきさ子が二十になつた。」

⑤「きさ子は私と結婚しないのに——二十になれたのは、何故だ。きさ子を二十にしたのは、何者だ。——とにかく、私ではない。」

⑥「見よ、汝と婚約した十七の娘は汝の妻としてではなく二十になれたではないか、と私に戦ひを挑むのは誰だ。」

⑦私はこのどげしやうもない事実を、その時初めてほんとに心で擲んだのでした。⑧そして、齒をぎりぎり噛みしめてうつむいてゐました。(96)

例3の内容は、この二例に具体的に見られる。例3の「一枚の芦の

葉」というのは例4に、同じく「きさ子が二十になつたこと」というのは例5に見られる。そして、そのそれぞれの結びが、例3の「同じやうに戦ひを挑まれた気持ちでした」に相当するものとなつてゐるのである。例4には「私は戦ひを挑まれてゐるやうな気持ちになつて来ました」とある。例5には「見よ、汝と婚約した十七の娘は汝の妻としてではなく二十になれたではないか、と私に戦ひを挑むのは誰だ」とある。まず、「一枚の芦の葉」も、「きさ子が二十になつたこと」も、それぞれ「第一の遺言」という全体を構成する一つ一つの小さな話なのだということが認められよう。ついで、それらが、「戦ひを挑まれた気持ちでした」という共通の帰着点をもつことによつて、全体というまとまりにつながつてゐることを考えることができよう。「第一の遺言」という全体の立場から、これらの例を見てゆく時、全体は、二段階からなる展開によつて構成されてゆくのだと考えられるではあるまいか。

第一の段階は、例4なり、例5なりが、それぞれに小さな話として、「戦ひを挑まれた気持ちでした」に結ばれてゆく段階である。

第二の段階は、そうして結ばれた小さな話しが、「戦ひを挑まれた気持ちでした」という共通の帰着点のあるところから、「第一の遺言」という全体につながつてゆく段階である。この二つの段階の、展開のありようについて比較考察を試みたい。

結論から言えば、この二つの段階の、展開のありようには、それぞれ別種の特徴が認められるのである。第一の段階の展開は、一定の方向に、一定の順序をもつて進められてゆく。第二の段階の展開には、必ずしも、そうした一定さが認められな

第一の段階の展開は、例4については次のようである。なお、例

4については、まず、後半のみをとりあげることとした。後半の最初の文「一枚の芦の葉です」に文①と番号を付し、以下順序にこれにならう、例4は内容上、「芦の葉」の勢力が次第に拡大されてゆく、一定の方向をもったすじとして把握できる。形式上、一一の文には定まった順序があつて、文と文との、前後の順序を入れかえることはできない。一一の文に従つて、こうしたことを確かめてみよう。文①は、その直前にある「ところが、私の眼に一本の線を引いてあるものがありました」という文を受けて、「一本の線を引いてあるもの」が「一枚の芦の葉」であることを認めた文である。例4は、この「芦の葉」の確認から始まる。文②は「その線がだんだんはつきりしてきました」とある。「芦の葉」の勢力の拡大が始められたわけである。文④は「芦の葉が私の眼の中一ぱいに拡がつて来ました」とある。「芦の葉」の勢力は、「私の眼の中」で拡大を続け、「一ぱい」になる。文⑤は「私の眼は一枚の芦の葉になつて行き来した」とある。「芦の葉」の勢力の拡大は、「私の眼」の実質の転化にまで及んでゆく。文⑥は「やがて、私は一枚の芦の葉でした」とある。「芦の葉」の勢力は、「私の眼」にとどまらず、「私」にも及ぶわけである。文⑧は「その芦の葉が、川口や海原や島々や半島やの大きい景色を、私の眼の中で完全に支配してゐるではありませんか」とある。「芦の葉」の勢力は、「私」を支配するにとどまらず、「大きい景色」をも支配してゆくのである。そうして、文⑨の「私は戦ひを挑まれてゐるやうな気持ちになつて来ました」に至るのである。例4の話は、文③及び文⑦を一応別として、文がつながつてゆくたびに、「芦の葉」の勢力が拡大されてゆくという一定の方向に、一定の順序に従つて展開し、至るべき結果に至りつゝ

いるということができよう。そして、一一の文の順序は固定しておき、文と文との、前後の順序を入れかえらうと、こうした秩序は破られてしまふのである。なお、文③及び文⑦のような文のありようについては、別の機会に述べることとする。

例5のばあいはどうであるう。かゝこのついで四つの文を比較してみたい。文③は「きさ子は二十になつた」とある。文④は「私と婚約した十七のきさ子が二十になつた」とある。文③にくらべて文④には「私と婚約した十七の」という余分がある。「きさ子」はこの余分によつて具体化し、ことは鮮明化してゆく。文④にくらべて文⑤には「私と結婚しないのに」「何故だ」「何者だ」「とにかく私ではない」という余分がある。そのうち「私と結婚しないのに」は、文④の「婚約した」に応じて、「きさ子」と「私」との間を具体化し、ことは鮮明化してゆく。「何故だ」「何者だ」「とにかく私ではない」では、「きさ子」「私」以外に第三のものが加えられる。この第三のものは文⑥に展開する。文⑤にくらべて文⑥には「私に戦ひを挑むのは」という余分がある。文⑤の、第三のものゝ加入に応じてみれば、第三のものゝありようが具体化し、ことは鮮明化してゆくと言えよう。例5の話しにおいて、「きさ子は二十になつた」ということが鮮明化してゆくという方向があつて、例4のばあいと同様に、話しが一定の方向に、一定の順序で展開してゆくということが認められるようである。かゝこのついで四文の前の文②に「私はふと気がつきました」とあり、四文の後の、文⑦に「私はこのどうしようもない事実を、その時初めてほんとに心で掴んだのでした」とあつて、「気がつきました」が、「心で掴んだ」に展開したようにみられることも、前に述べた傾向と矛盾しない。

例4においても、例5においても、話しは、一定の方向に一定の順序をもって展開し、一文一文の、前後の順序は固定して動かさなうとすることが認められるようである。第一の段階の展開が有する特性をうかがうことができるのではあるまいか。

第二の段階の展開は、第一の段階でこのようにしてなりたつてきた個の話しが、全体として統一されてゆくところにある。その統一のあり方を端的に示すものが、すでに述べたように例3の内容である。例4としてあげた「一枚の芦の葉」の話しと、例5としてあげた「きさ子が二十になつたこと」の話しが、それぞれ「戦ひを挑まれた気持がした」に至りつくところから、その共通点をもって統一されてゆくのである。第二の段階の展開には、第一の段階の展開とはことなる特性があるように思われる。第二の段階の展開がどのようなものであるか、さらに類例を求めて考えてみたい。

「第一の遺言」中に、全体を構成してゆく小さな話しが存在することは、前掲の「一枚の芦の葉」の話し、「きさ子が二十になつたこと」の話しのようにである。ところが、こうした話しは、その二つにとどまらない。他に三つの話しがある。というより、「第一の遺言」は、冒頭の部分である例1、終末の部分である例2及び例3を除けば、残りの部分は、五つの話しですべてなのである。前掲の二つの話しの前に一つ、その後二つある、残る三つの話しをとりあげてゆくこととする。まず、前にある話しと、後にある話しのうちの前の方の話しの主要部分をあげる。

6 その日も河口の砂原へ行く途中で、私は学校から帰つて来る少女に出会ひました。少女は松葉杖の上に怒つた肩を蝙蝠の翼のやうに羽ばたいて、びよくりびよくりと跳るやうに砂浜を歩いておま

した。砂や波の上は影のない七月でした。突然少女は大きいあくびをしました。

「あつ。暗闇。暗闇！」

ざらざら眩しい光の世界で、少女が大きく開いた口の中に、唯一点の暗闇が生れたのです。その暗闇はじろりと私を眺めました。どうして私はこんなものにびよくりするのでせう。その後で見た芦の葉にしてもさうです。(94)

7 こんなことがあつたからかもしれません。その後間もなく私はもう一人の女りか子の前で、

「はははははー。」と笑つてしまつたのです。

「ほんとにお聞きしないほうがよかつたわ。ほんとにお聞きしないほうがよかつたわ。」と、りか子は言ひました。すると、重苦しい気持で恋を打ち明けてみた私は、

「はははははー。」と、笑つてしまひました。なんといふ虚しい笑ひ声でせう。自分の笑ひ声を聞きながら、まるで星の笑ひ声でも聞いたやうに、私はびよくりしました。それと同時に、自分といふ一本の釘が音もなく折れて、その釘にぶら下つてみた私はふうつと青空へ落ちて行きました。(100)

例4と例5とは、共通に「戦ひを挑まれた気持がした」ということがみられた。「一枚の芦の葉」の話しと「きさ子が二十になつたこと」の話しとは、「戦ひを挑まれた気持がした」ということによつて、例3にみられるやうに、全体の構成へ参加してゆくことと認められるのであつた。例6と例7とのばあいどうであるう。例6と例7とのばあいにも、第一の段階の展開とみられる展開の他に、両者に共通するものが認められ、番二の段階の展開と言えるものが認めら

れるようである。例6には「びつくりする」というのがある。例7には「びつくりしました」とある。共通するものがみられるのである。ただ、このばあい例4と例5のばあいの例3に相当するものを見出すことはできない。「びつくりする」について考えてみなければなるまい。

例6の「どうして私はこんなものにびつくりするのでせう」の後、「その後で見た芦の葉にしてもさうです」とあるのが注目される。「びつくりする」ということは、例4の「一枚の芦の葉」の話にもあるようである。が、「一枚の芦の葉」の話には、「びつくりする」という語句を見出すことはできない。そこで考えられるのが、例4にある「私は戦ひを挑まれてゐるやうな気持になつて来ました」というのが、「びつくりする」に相当するのではないかということである。例6において、「私」の見た「暗闇」に対する反応として「びつくりする」が生じ、例4において、「私」の見た「芦の葉」に対する反応として「戦ひを挑まれた気持」が生ずるということがみられる。二つの例の話しの展開には、共通に、見る立場から自分の気持に立帰るといふ形が認められるようである。「びつくりする」「戦ひを挑まれた気持がした」は、共通に自分立帰るといふ所に位置しているわけである。例6にいう「その後で見た芦の葉にしてもさうです」といふ点に立って言えば、話しの展開の上での位置が同じであるということ、**「びつくりする」と「戦ひを挑まれた気持がした」が同じものであつてもよいわけである。その点をはっきりさせるものとして、次のような個所がある。**

8　そして実際、私の頭の中にはたんぼほの花が咲き、陽炎が揺れてゐるのでした。父の姿なぞどこにも見えませんでした。き

さ子もおませんでした。私と結婚の約束をした十七のきさ子が私の妻としてではなく二十になれた——このことについての、さつき(100)の白い驚きも消えてしまつておました。

さうして、私の感情はだらりと尾を垂れて眠がつておました。

前に掲げた例5に始まる「きさ子が二十になつたこと」という話しの終りの部分である。この例では、「私と結婚の約束をした十七のきさ子が私の妻としてではなく二十になれた」ことについて「白い驚き」としてゐる。ここにみられる「さつきの白い驚き」とは、例5において考えられた「戦ひを挑まれた気持がした」ということを意味するのではなからうか。例5のうちから、例8の「私と結婚の約束をした十七のきさ子が私の妻としてではなく二十になれた」に相当する部分を除いてみる。「何故だ」「何者だ」「とにかく私ではない」、そして「私に戦ひを挑むのは誰だ」が残る。例8の「白い驚き」は、「戦ひを挑まれた気持がした」ということと同じ内容なのだと思はれるようである。その「白い驚き」と「びつくりする」との結びつきは容易に考えられよう。

例6に「その後で見た芦の葉にしてもさうです」とあることから、例6の「びつくりする」が、例4の「私は戦ひを挑まれてゐるやうな気持になつて来ました」と同じ内容ではないかと考えられた。例8の「白い驚き」が、例5の「戦ひを挑まれた気持がした」ということと同じ内容ではないかということも考えられた。「びつくりする」と「戦ひを挑まれた気持がした」とは、内容上一致するものであると言ふことができるようである。

すでに述べたように、例6には「びつくりする」とあり、例7に

は「びつくりしました」とある。それぞれの話しが第一の段階の展開で至りつくところとして、共通に「びつくりする」をもっているのである。このまま、この二例について、第二の段階の展開はと言えば、「びつくりする」という共通点によつて二つの話しが結びつき、全体の構成に参加してゆくのであると言える。ところが、「びつくりする」は、「戦ひを挑まれた気持がした」に内容上一致すると考えられる。こうなると、問題は、例6、例7のみにとどまらない。例4も例5も、第一の段階の展開が至りつくところは「戦ひを挑まれた気持がした」であつた。例4、例5、例6、例7の四つの話しについて、第二の段階の展開はみななければならぬ。四つの話しは、「戦ひを挑まれた気持がした」という共通点によつて互に結びつき、全体の構成に参加してゆくと考えられるのである。

残る一つの話し的主要部分は次のとおりである。

9 | ところが、すべてこれらの感情を私の熱病がみごとに裏切りました。

五月でした。私は熱病を患つて死にかかつておりました。熱に浮かれて意識を失つておりました。

「きさ子。」
「きさ子。」
「きさ子。」
「りか子。」
「りか子。」
「きさ子。」
「きさ子。」

私はうはごとを言ひ続けてみたさうです。

私の枕辺にゐた伯母は奇蹟が好きだつたのでせうか。りか子を私の病床へ呼んでくれたのでした。りか子、と私が呼ぶ声に、りか子が答へたならば、私が命を取り止めるかもしれないと考へたのです。

二人の女のうち、きさ子はその時どこにゐるのか分らなかつたのです。いいえ、伯母はきさ子といふ女の名をその時始めて聞いたのです。ところが、りか子は伯母の姪だから嫁入先も分つてゐたのです。第一、それが奇蹟ではないでせうか。そして、奇蹟は第二第三と続いたのでした。

りか子は直ぐに私の枕辺へやつて来たさうです。するとどうでせう。

「りか子。」

「りか子。りか子。」

「りか子。りか子。りか子。」

私はりか子の名ばかり呼んださうです。きさ子の名は一度も呼ばなかつたさうです。考へても見て下さい。私は高い熱で意識を失つてゐたんですよ。私はこれを、人間の中の悪魔の狡猾——など言つて片づけられない気がします。後でこのことを伯母から聞いた時私は、

「これは死ぬに価する。」

と、何気なく呟いたのでした。(101-103)

従来例とちがって、この例には、「戦ひを挑まれた気持がした」ということや、「びつくりする」ということをみる事ができない。が、次のような点は見逃せないのではあるまいか。まず、「第一、

それが奇蹟ではないでせうか。そして、奇蹟は第二第三と続いたの
でした」とある点で、「奇蹟」の連続が「びつくりする」という反
応につながるのではないかとすることがある。ついで、「私ばかりか
子の名ばかり呼んださうです。きさ子の名は一度も呼ばなかつたさ
うです」とあつて、それについて「私はこれを、人間の中の悪魔の
狡猾——なぞと言つて片づけられない気がします」とある。「りか
子の名ばかり呼んだ」ことが「びつくりする」という反応につなが
るのではないかとすることがある。「悪魔の狡猾——なぞと言つて
片づけられない」というところに「戦ひを挑まれた気持がした」と
いうことにつながるものがあるのではないかとも思われる。「これ
は死ぬに価する」という呟きにも、そうしたことが考えられなくは
ない。具体的な「びつくりする」「戦ひを挑まれた気持がした」に
相当するものはみられないけれども、内容上、類似した結果がある
ということもできるはずである。そうであるとすれば、この話しも加
えて、例4、例5、例6、例7、例9のすべての話しは、「戦ひを
挑まれた気持がした」という共通点によって結びつき、全体の構成
へ参加してゆくのだということになる。

ともあれ、少なくとも五つの話しのうちの四つまでは確実に、残
る一つも可能性をもって、「戦ひを挑まれた気持がした」という共
通点によって結びあい、全体の構成に参加していつていると言うこ
とができるであろう。

第二の段階の展開は、「第一の遺言」の全体についてみて、以上
のようである。第二の段階の展開は、すべての話しについて、少な
くとも四つの話しについて、「戦ひを挑まれた気持がした」という
ところで結びあう特性をみせている。それぞれの話しの至りついた

ところだけで言えば、「戦ひを挑まれた気持がした」ということが、
五つ並べられているということでもある。第一の段階の展開にみら
れた、一定の方向に一定の順序で展開するというのが明らかなにこ
となる。同じものを並べて、一定の方向、一定の順序などというこ
とは無意味であろう。それぞれの話しの至りついたところを「戦ひ
を挑まれた気持がした」という文と考えれば、それらの文の、前後
の順序を入れかえることも無意味であろう。第二の段階の展開にお
いては、方向だの、順序だのをいうことは無意味であり、並べあけ
るといふ点が注目されるのではあるまいか。並べあげられたものが
一致していることによって、全体の構成が保たれていると考えられ
るのである。

ここで、最初にあげた問題の解決が見出される。例1と例2とを
比較して、冒頭の部分である例1から、終末の部分である例2に至
るまでの十頁の間に、内容上、何らの文脈の展開もなかつたのだら
うかという問題である。「第一の遺言」は、すでにみてきたように
五つの話しによって構成されている。五つの話しは、それぞれ、一
つ一つの話しとしては、一定の方向に一定の順序で展開してゆくと
いう第一の段階の展開をもち、そのかぎりではうつりゆく文脈の展
開がみられるのである。ところが、そうした第一の段階の展開が至
りつくところは、常に「戦ひを挑まれた気持がした」という一定の
帰着点である。そこに、第二の段階の展開が生じる。「戦ひを挑ま
れた気持がした」という、どの話しにも共通の帰着点が、話しと話
しとを結びつけ、全体の構成を形成してゆくのである。このことが
結果的に示されているのが、例3の「一枚の芦の葉からも、きさ子
が二十になつたことからも、同じやうに戦ひを挑まれた気持がした

といふだけなんです」だと思われる。「戦ひを挑まれた気持がした」というのは、「一枚の声の葉」の話と「きさ子が二十になつた」との話だけでなく、他の三つの話しのばあいも同様である。第一の段階の展開で、うつりゆく文脈の展開をみせた個の小さな話しは、それぞれに、第一の段階の展開を「戦ひを挑まれた気持がした」というところで終り、第二の段階の展開に転じてゆく。第二の段階の展開は、個個の話し、個個の展開、うつりゆく展開をすべて「戦ひを挑まれた気持がした」という一点にとどめてしまう。「第一の遺言」の全体としては、うつりゆく文脈の展開がふせぎとめられたところに、文章としての成立があると言わなければなるまい。冒頭の部分と終末の部分との間には、以上のような展開のありようが認められるのである。

さて、こうした、第一の段階の展開と第二の段階の展開とを統一的に把握してみたい。そのための手がかりとして、例4、例5、例6、例7、例9の棒線をほどこした部分が注目される。例4の「その日も」、例5の「去年の秋のことでした」、例6の「その日も」、例7の「その後間もなく」、例9の「五月でした」がそれである。五つの話しには、それぞれ特定の時が与えられている。第一の段階の展開は、その特定の時の、時の持続に従う表現ではなからうか。一定の方向に一定の順序でという秩序は、時の持続に従う秩序なのであるまいか。一文一文の、前後の順序を入れかえることができないのは、その順序が、時の持続に従う秩序をもっているからだと思われるのである。特定の時の、時の持続は動かせないはずである。文の順序は、その、時の持続という動かせないものに従っているのだと言えよう。それに対して、第二の段階の展開は、時の持

続に従う秩序とかわりなくなりたっている。第二の段階の展開は、「戦ひを挑まれた気持がした」という同じことを並べあげるところになりたっている。同じことを並べあげるのに順序を言うことは無意味であろう。時の持続に従う秩序を言うことも無意味であろう。いずれが先でも後でもよいはずである。

このことから、この二つの段階の展開は、次のようにも考えることができよう。第一の段階の展開は、他律的な表現としてみられ、第二の段階の展開は、自律的な表現としてみられるというように考えられるのである。第一の段階の展開を律するものは、特定の時の、時の持続に従う秩序であり、第二の段階の展開は、表現主体の意志によって配列が律せられると考えられるのである。表現主体中心に言えば、前者は、他によって律せられるのであり、後者は、主体そのものによって律せられるのであるという意味である。ところで、特定の時の、時の持続は、これを経験として受容することができるはずである。他律的な表現とは、経験にもとづく表現であるとも言うことができるのではあるまいか。主体の意志によって配列の律せられる表現とは、自らに区別が認められるようである。第一の段階の展開を、経験にもとづく表現としてみられるという意味で、客観表現と呼び、第二の段階の展開を、主体の意志によって配列が律せられる表現としてみられるという意味で、主観表現と呼ぶこととする。

「第一の遺言」は、このように二重の表現構造をもってなりたっている。客観表現とみられる五つの話しをまず並べ、その五つの話しの至りつくところが同一であるところから、文章としての全体的統一を得るといふ構造である。そこに主観表現というもの

が認められる。文章という全体的統一に直接かわる表現方法は、主観表現であるということができる。極端な言いかたをすれば、「戦ひを挑まれた気持がした」という固定した主観に、五つの客観が、その、それぞれ個別にあることを超えて吸収されてゆく文章が、ここにあるのだということもできるようである。端的に言えば、「第一の遺言」という全体から、「戦ひを挑まれた気持がした」ということを取り去ってしまったばあい、全体は、全体としてのまとまりを失い、文章としてなりたたなくなると言えばよいわけである。こうした文章を主観表現のまさった文章と呼ぶこととする。

なお、時の持続に従う秩序をもつ表現と、もたない表現との、文章への参加のありようが、主観表現のまさった文章とは逆のばあいつまり、客観表現のまさった文章というのものもある。それについては、時の持続に従う秩序をもつ表現と、もたない表現とについての再検討とあわせて、別稿(注2)に述べることにし、その際には、文章の基本的類型についての展望もこころみるようつとめてみたい。

おわりに

以上のような主観表現のまさった文章が、かりに文章の一つの型として認められるというようなことがあれば、以上のような考察は、文章の類型を追究するための一つの基礎的作業として、その意義が認められるであろう。以下、主観表現のまさった文章について、そのありようによる多少の検討を加えてみたい。

「第一の遺言」が、全体としてまとまりを得るためには、端的に言えば、例3に掲げた「くからも、くからも、同じやうにく」とい

うような、一定の主観に帰着する構造が必要であると考えられた。こうしたものの類例を見出すことはさほど困難ではない。たとえば、「青い海黒い海」の「第二の遺言」の、冒頭の部分をとりあげてみると次のようである。

10 「私は死ぬ。りか子は生きてゐる。私は死ぬ。私は死ぬ。りか子は生きてゐる。生きてゐる。生きてゐる。生きてゐる。」
あの時の気持を言葉で現せば、かう言ふよりしかたがありません。あの時とは——私が短刀でりか子の胸を突き、それから自分の胸を突いて、意識を失つて行く時のことです。

ところが、どうでせう。私が意識を取り返してみると、最初に浮んだ言葉が、

「りか子は死んだ。」

といふのでした。しかもそこに、

「私は生きてゐる。」

といふ言葉は伴つて来ないのでした。そればかりではありません。私が意識を失つて行く時には、

「私は死ぬ。りか子は生きてゐる。」といふ言葉が浮んだのではなかつたのです。その時の気持を言葉で現さうとすれば、

さうとよりしかたがないといふだけなんです。

その時私の頭を走り過ぎたすべてのもの、火のやうに熱い小川に見えた流血や、骨の鳴る音や、蜘蛛の巣を伝はる雨滴のやうに幾つも幾つも流れて来る父の顔や、渦を巻いて飛び廻る叫び声や、さかさまになつて浮沈みしてゐる古里の山なぞの、どれもこれもから私は、

「りか子は生きてゐる。」といふ同じ一つのことを感じたの

い海」にも、反復の著しさが認められる。が、これをいうだけでは十分であるまい。

そこで、次のような点が注目される。「田園の憂鬱」の終末の部分には、合計十個の「おお、薔薇、汝病めり！」が反復して見られる。ところが、この「おお、薔薇、汝病めり！」の反復は、ただ単純に、そのみをくりかえしているわけではない。「おお、薔薇、汝病めり！」の反復には、それにつながりがあるかのごとく、他の、さまざまな反復がともなわれるのである。十個の、「おお、薔薇、汝病めり！」がある部分を互に切り離して、それらを個別に見たばあいいにも、それらを相互に見合わせればあいいにも、さまざまな反復が認められることは前稿に述べたとおりである。中には、「おお、薔薇、汝病めり！」に直接つながるのではない単純な反復というよりなものもあるかもしれない。が、「一面に、真青に、無数に、無数に……」「おお、薔薇、汝病めり！」とか、「それは静で、静である。涙しなく静である。」「おお、薔薇、汝病めり！」とかいうようなものもある。これらは、「おお、薔薇、汝病めり！」に直接つらなる部分に、形のととのいが見られる例と言えよう。そのもっとも端的な例が、例11なのであるまいか。また、「その手を前へ突き延す利那、」「おお、薔薇、汝病めり！」、「と、その利那に、」「おお、薔薇、汝病めり！」、「ばつと、手元が明るくなつた利那に、」「おお、薔薇、汝病めり！」というような例を見合わせればあいい、これらは個別にはなく、例相互の間につながりをもつて、「おお、薔薇、汝病めり！」につらなる部分に、形のととのいが見られると言えよう。

以上のような例は、例3、例10、あるいは例11と比較して言えば、

差異あるものとも言えよう。が、ここにみられる形のととのいは何を意味するのであるうか。「おお、薔薇、汝病めり！」という、一定のものが優先することに意味が見出されるのではあるまいか。殊に、多くの例にもまたがって、形のととのいがあるというげあいなどは、「おお、薔薇、汝病めり！」という、一定の帰着点が、表現主体によって維持されていることに意味を認めないわけにはいかならぬであろう。「田園の憂鬱」においても、表現主体の維持する、一定の帰着点である表現が、全体としてのまとまりを得させているということができるとであろう。

表現主体によって維持された一定の帰着点に形をととのえて至りつくという、最終的な構造をもつ主観表現のまさった文章を、文章の一つの型と認めることができるのではあるまいか。

注1 拙稿「佐藤春夫『田園の憂鬱』の文体について」・国文学攷

40号

注2 拙稿「文章の基本的類型について」・広島大学文学部紀要26

巻